

緑陰

「緑陰」題字

本庄第一高等学校 本元彩乃

第9号

平成27年12月8日発行

一般社団法人
埼玉県私立中学高等学校協会
〒330-0063
埼玉県さいたま市浦和区
高砂4丁目13番20
電話 048-863-2110
HP
www.saitamashigaku.com

塾の隆盛と私立学校へのニーズ

一般社団法人埼玉県私立中学高等学校協会 小川 義 男
(狭山ヶ丘高等学校付属中学校 高等学校校長)

しばしば指摘することだが、我が国における学習塾の隆盛は、異常とも言うべきものである。これは、公立中学校教育の現状に対する、無言の批判だとも言えるのではないだろうか。通塾には、長期講習等の経費を入れると、年間五十万円はかかる。これが、少子化を構成する大きな要因となっている事は間違いない。子ども五人を塾に通わせたら、普通の家庭なら破綻してしまうだろう。

公立学校教育の現状が、私立学校に対するニーズの根底を為している。昔、公立の小学校、中学校に勤務した身としては、省みて忸怩たるものがあるというのが本当のところである。

そんなこんなで私立中学や高等学校を目指して下さるのだが、私立学校には金がかかる。

「塾に金がかかる」「私立学校に通うにも金がかかる」、まるで塾も私立学校も「金食い虫」であるかのような塩梅である。

だが世間には、塾よりも私立学校よりも、遙かに多くの「金を食っている」学校がある。公立小学校にも、公立中学校にも、粗々に計算して、一人年間百万円程度の経費がかかっている。月額にして九万円程度になるだろうか。金を食う競走と言う事になれば、塾も私立学校も真つ青だ。

公立学校は、親の直接の負担こそゼロだが、国民の総支出という見地から見たとき、決して安上がりの学校ではないのである。

世間の人々は、この事を忘れている。心ある政治家が、「公設民営」を強調なさるのも、この消息に由来している。

小学校に勤務していた頃、退勤しようとして駅で、自校の児童に出会った。どこへ行くのかを尋ねると、「これから勉強の学校に行く」と答えられて参った事がある。一緒にいた同僚と、「夜通うのが勉強の学校だとすれば、我々の学校は遊びの学校になるのかなあ」と苦笑したものである。

これは、現在私立に勤務する私にとっても他人事ではない。若しかして私の学校でも予備校に通っている生徒がいるかも知れないからである。名門公立と言われる高等学校でも、予備校との「二足の草鞋」を履いている生徒が少なくないと聞く。私立にせよ公立にせよ、学校はもつと気持ちを引き締めなければならぬのかも知れない。

私立中学校の学費が小さくないのに、あえてここを志望してくる生徒が少なくないのは、このような事情に胚胎している。

ともあれ、高校には、高所得の保護者以外には政府から月額一百万円の給付があり、埼玉県からの、学校に対する相当額の補助金がある。その保護者に対して、全国トップクラスの「父母負担軽減措置」が埼玉県には存在している。これは主として、埼玉県議会の先生活方の英知あるご高配と、行政のお力によるものである。私学も公立も、常にその高恩を忘れるようなことがあってはなるまい。

だが私立中学校に対しては、政府の給付もなく、県からの補助金も極めて

少ない。「父母負担軽減措置」は存在しない。

憲法第二十六条が、「義務教育は無償とする」と定めているのに、政府、判例、通説の立場は、「希望すれば全員公立中学校に通えるのだから」という理由で、義務教育ではない高等学校とは打って変わって冷遇している。

仮に、あくまでも仮にだが、全国の私立中学校が、すべて学校を閉鎖したとする。在籍生徒の全員は公立中学校に向かう。政府、自治体は、これらの生徒全員を、直ちに公立中学校へ迎え入れる絶対の責任を負う。

埼玉県で、これから私立中学校の生徒数が増大したとすれば、県では、その分の教育支出が削減されるのである。

このあたりを考えると、公立中学校の存在を名として、私立中学校を、私立高等学校と差別している現状は、どう考えても当たり前の事ではない。

政府、判例のこれまでの主張は、いづれ、砂漠の熱砂に引きずり出された氷塊のように、融け去る日が来るであろう。

我々は、私立中学校の生徒、保護者のため、これからも、中高較差廃絶のため努力するが、県内の良識ある方々が、その趣旨をご理解下さり、公私の境を超えて埼玉県の教育一層の充実のため、立ち上がって下さる事を、切にお願い申しあげるのである。

夜空に星が多かった頃

中高協会会長 小川 義 男

(狭山ヶ丘高等学校付属中学校・高等学校校長)

私が六年生の頃、敗色濃いアメリカとの戦争の末期、父は家から12キロほど離れた原始林の中に「三角兵舎」を造るために、職人さんたちと一緒に出かけました。どんな事情で父に会いたくなつたのか、そのあたりの記憶はないのですが、とにかく私は、歩いて父のもとまで行くことにしました。

「三角兵舎」とは、半地下式の戦闘用兵舎です。地面に長方形の穴を掘り、その上に材木を三角に組んで屋根を造ります。その屋根に更に50センチほどの土を載せます。半地下式ですから、爆撃されても、直撃でない限り内部の兵士は助かるわけです。

歩き回っていて、歩行には強かった当時の小学生ですが、それにしても、12キロは簡単な道ではありませんでした。国道を歩き続け、昼なお暗い原始林に入ってから、怖さも混じり後悔しはじめたものです。歩いているうちに、日はすっかり暮れてしまいました。手探りで歩く原始林の怖さは、今も私の記憶に鮮烈です。それだけに、

前方に灯火がチラチラ見え始めたときの嬉しさは格別でした。

「兵舎」の中では、仕事を終わった職人さんや人夫（ニンプ）の人たちが、それぞれ焼酎を飲んだり花札をしたりしていました。みんな少年の私を見て驚きましたが、間もなく、「小川さん、息子さんが来たよ。」と、既に横になつていた私の父に知らせてくれました。息子の意外な出現は、父にとり嬉しかったようです。しかし、感情を表に出す人ではありませんから、淡々と、私が、どうして急にこんな遠いところまで歩いてきたのかを尋ねました。

仕事を終わつた人たちの飯場（ハンバ）の雰囲気は、私に取りとても馴染みやすいものでした。夜も相当更けた事ですし、私は当然その日は飯場に泊まり、翌日遅れて学校へ行けばよいのだと思っていました。丁度11時頃だったでしょうが、父が、「義男、もう遅いから、お前そろそろ帰れ。」と言つたのです。

驚天動地とはこのことです。六年生

の少年が、深夜の原始林を越え、12キロの道をどうやって帰るというのでしょう。季節は晩秋ですから、熊が出るかも知れません。いや、出て当たり前なのが、当時の北海道だったのです。

しかし、父は厳しい人でした。泣けば泊めてくれるというような生やさしい人柄ではなかつたのです。それをよく知っている私は、べそをかきながら立ち上がりました。「途中まで俺が送つてやるからな。」そう言う父は、私を先に立たせ、すたすたと、ついて来ました。手を後ろに組んでいるのですが、その手に何か大きな枝を持つているようでした。しかし、闇の恐怖に怯えている私に、それが何であるかなど考える余裕はありません。

小一時間も密林を歩き、幅広い国道に出ました。父はそこで、道路脇の材木に腰掛け、長いこと、私と話をしていました。私は父の真意を測り兼ねていたのですが、そのうちに一台の馬車が近づいて来ました。父は、その馬車追いに、どこまで帰るかを尋ねました。その人が私の家のある町まで帰ると知ると、「すまないが息子をそこまで乗せていってくれ。」と頼んだのです。私がほつとしながら馬車に乗り込むと、父は後ろ手に持っていたひと枝を私に渡し、「これでも食いながら行け。」

と言いました。

それは、実が重いくらいに沢山ついている「こくわ」のひと枝でした。

「こくわ」は、北海道の山に生える最もおいしい食べ物です。大きなもので、大人の親指くらいの大きさでしょうが。実が青くてふにやふにやしています。甘いというか、酸っぱいというか、それが適度に混じり合つて、とてもおいしいのです。私は世の中に、あれほどおいしい食べ物ほかにないと、今でも思っています。たやすく手に入る山葡萄とは異なり、深山に入らなければ手に入らないので、そんなに沢山の「こくわ」を食べたのは、そのときが初めてでした。

もともと、山葡萄も、時には「こくわ以上」に実力を発揮することがあります。雪が降り積もり、根雪になった後、スキーや「かんじき」で森の中を歩くのは、快適です。ごく稀に、極々稀にですが、落ちずにぶら下がっている葡萄に出会うことがあります。必ず実のつき具合が悪く、まばらにしか実がついていない葡萄です。当然陽光を充分に受けていますから、雪中に味わう山葡萄の旨さは絶品です。こくわとどちらが上かと聞かれても、返答に窮するくらい、どちらも旨いのです。こくわは、私の独断ですが、多分「キ

「ウイ」の変質したものです。南国のキウイが、寒冷化に伴ってその毛を失い、緑のつるつるした実になったものか、毛が生えている南国のキウイが、北国の気候に順応して、つるつるの小さな実に変化したものかは分かりませんが私は、確信を持って断言します。それは、全く同質の果実であると。

固いこくわは、米びつの中に入れておくと、柔らかく、信じられないほど旨くなります。しかし、木になったまま完熟したこくわは、まさに絶品と言えるほど旨いのです。父にもらった「旨いこくわ」は、まさに木になったまま完熟した、そのこくわだったのです。

話を戻しましょう。馬車に揺られながら、時折馬車追いのおじさんの問いかけに答えたりしながら、私は「こくわ」の実を食べ続けました。

ふと空を見上げると、信じられないほどの数の星が煌めいていました。天の川などは、それこそ、かご一杯の銀の粉をぶちまけて、竹箒で掃いたように輝いています。

「こくわ」を食べる以外にすることのない私は、じっと夜空を眺め続けました。流れ星が、次々に流れていきます。それまで私は、流れ星は、滅多に見られるものではないと思っていたのですが、三時間も馬車に揺られ続けて

いる間に、ほとんど絶え間なく星が流れているのに驚きました。

今とは比べものにならないほどに夜空が澄み切っていたのか、当時の田舎には、明かりらしい明かりがなかったからなのか、あの夜の星の美しさは、自らのその後の人生に影響を及ぼしたのではないかと思うほどに美しいものでした。

それからの永い歲月、無骨ながら、深く私を愛した父はこの世にありません。ずっと長ずるに及んでから私は思うのですが、あの夜、父は深夜の原始林を歩いて帰って、怖くはなかったのでしょうか。

当時私に取り、父は絶対の存在でした。恐ろしいなどとは無縁の筈の人でした。しかし、自分も十分に年を取った今、人間は、幾つになっても、決してそれほど大胆になれるものではないことを知っています。また、はるばる遠くまで父を慕ってきた息子を、深夜の路上に追い返す父の心がどんなものであったか、今の私にはそれも分かりません。

親の心が分かるのは、自分が親になつてからだ、よく言われます。結局親心というもの、子供を育てている間には分かってももらえないものなのでしょう。

生徒の皆さん一人一人にも、父、母との、珠玉のような美しい思い出があることでしょう。しかし、私のように、親に死に別れた後に、しみじみ懐かしと思うのではなく、できれば、ご両親が元気なうちに、その有り難さや優

しさが理解できる人間に育って欲しいと思うのです。せめて父の存命中に、あの夜の「こくわ」がおもしろかったことくらいは語っておきたかった。今私はそのことを後悔しています。

「公私間格差の是正」スローガンに ～ 平成27年度 埼玉県私学振興大会 ～

毎年11月、中高協会と埼玉県小学校中学校高等学校保護者会連合会（略して埼玉私学保連）が主催で、埼玉県私学振興大会を開催しています。今年度の大会で9回目を迎え、会場となる「さいたま市文化センター」に、学校関係者や私学に子供を通わせている保護者ら約2,000人が集まり県当局及び県議会に対する要望事項を次のように決議しました。

大会決議事項

- 1 私立学校運営費補助の補助率を早急に見直し、補助金を大幅に増額すること。
- 2 小・中学校保護者に対する県独自の「父母負担軽減」の支援制度を確立すること。
- 3 保護者の教育費負担における公私間格差を抜本的に是正し、学校選択の自由を保障すること。

本来、学校は、公立・私立を問わず、教育の中身によって誰でも自由に学校を選択できるようにすべきです。そこで大会スローガンを「公私間格差を是正し、義務教育を含む学校選択の自由を保障せよ!!」としました。

現在、県内私立高校の保護者には国の支援金・県の上乗せ補助が支給されていますが、私立小・中学校の保護者に対してはそのような補助制度がありません。そこで、高等学校教育における公私間格差の是正とともに、小中学校教育における公私間格差の是正についても強く訴えていきたいと思ひます。

私学教育に思いを寄せて

埼玉県議会自由民主党私学振興懇話会副会長

宮崎 栄 治 郎

私は埼玉県議会自民党私学振興懇話会副会長の宮崎栄治郎でございます。

選挙区はさいたま市南区選出です。埼玉の子供たちが独自の建学の精神に則った私学で学べる環境づくりに、些かなりとも力を注いでまいりたいと存じます。どうか、よろしくお願いいたします。

私の出身は川口市の北部、芝です。実家は農業で、兄、姉、私が次男で弟がいます。当時はわんぱくで、実家裏の長徳寺山（注：長徳寺は、山岡鉄舟が若い頃、数年間座禅を組んだ寺として知られている）でターザンごっこや川を遊び歩いて、フナやザリガニとりに興じ、全く毎日が自然相手でした。白鷺が田んぼに舞い降りて餌をついばんでいた頃の話であります。私自身は知りませんが、曾祖父が芝村で村長をしていて、村長時代川口市と芝村が合併（昭和15年）したとよく聞きました。そして、そのおじいちゃんは、「これからの時代は広域行政でなくては、やっつけていけない」と言っていたそうであ

ります。70年以上も前から言われ続けている言葉と今新たに思います。実家が「いずみ幼稚園」も経営し、兄が園長、私は当時では珍しい男性保育士を経験し、その後副園長を務めました。今は亡き県議6期を務めた義父宮崎守保の後継候補として平成15年4月県議に初当選し、連続4期目です。そんなご縁で議員になったのが埼玉県議会自民党私学振興懇話会に名を連ねる、一つのきっかけでもありました。私学教育は、文科省から定められている学習指導要領はありますが、独自の建学の精神に則った教育ができることから、校長以下、現場の先生方は向学心に燃えて頑張ることができます。議員になってからの仕事として、県議会では「埼玉から次世代をリードする子供たちを羽ばたかせるために、子供たちの海外派遣研修制度の実現を」「企業の協力を得て、世界的規模で事業展開する仕事や人に接する機会を」「子供の時代から科学に関心を持つ環境を作って」との私の質問に早速翌年

度の事業概要に盛り込んでいただいたことは、誠にうれしく思いました。これからの時代は、国際的に活躍できる次世代を育てることが大切と考えます。私は小学生からその機会を作るべきと質問しましたが、県は高校生・大学生の派遣を行ってきました。それでも時代をリードする施策として大きな前進で歓迎できると思います。子供たちの教育・健全育成は私のライフワークです。私学教育に携わる皆様方に於かれましては近未来を担う人材育成の観点から、よろしくご指導のほどお願いいたします。

最近のニュースでは、独裁国家体制の崩壊が気になります。中国の動きも心配です。これだけのネット社会になったのですから、情報を完全に遮断することは、難しくなっています。国家として、国民を力で抑え込むことは、できにくい環境になってきています。そのような観点からも、日本の若者に世界を俯瞰する気持ちを養いつつ、日本の中から進むべき道を教育の力で補っていただければと存じます。

また、現代は無縁社会と言われ、若い人が人間関係を作ることが苦手になってきているようです。チームプレーが上手く機能しない。学校ではあえて人間関係を作る授業を取り入れていま

す。このような国民が増えてきている現実があります。最近のアンケートで、親子が友達関係のような結びつきのためか、親を尊敬できるかとの質問に、アメリカ、韓国、中国、日本の順で、最下位が日本。親の老後を見るについても、日本が最下位でした。これらは、家庭教育であると同時に、学校教育、学校教育でしか是正できません。どうか、私学教育に携わる皆様方に於かれましては、世界から見て日本の素晴らしいところは、幾百とあるようですが、弱点も見えてきた昨今であります。素晴らしい埼玉県、日本を作るためには、私も埼玉県議会自民党私学振興懇話会も頑張ります。どうか、たくさんの忌憚のないご意見をお寄せいただき、埼玉県の私学の振興を共に前に前に進めてまいりましょう。

終わりに、一般社団法人 埼玉県私立中学高等学校協会様のご発展を心より祈念し、機関紙「緑陰」にお寄せする言葉といたします。



今思ひつと

埼玉県私立小学校中学校高等学校保護者会連合会会長 小林 哲也

(埼玉県議会自由民主党私学振興懇話会幹事)

本年より埼玉私学保連会長を仰せつかりました小林哲也です。二男一女の三人の子供を持つ父親です。東京農業大学付属第三高等学校の保護者会にかかわる前、子供たちの公立小学校のPTAの副会長を7年間、公立の中学校のPTA副会長を4年間仰せつかつておりました。しかし、今思ひ出すとPTAで学校に同っている間は、子供の事はそっちのけで公立学校はどういうものかといった義務教育課程の先生方の状況調査のようなお付き合いが多かつたような気がします。だからと言って与えられた役職を放棄していたわけではありませんし、勿論子供たちに興味がなかった訳でもありません。

そうした中で、どうしても気になったのが先生方の暗い顔。小学校の副会長を引き受けて2年目だったでしょうか。当時の校長先生から「今、おやじの会というのがいくつかの学校で活躍している。うちの学校でも作りたい。」という要望を頂きました。PTA会長

も幼馴染ということもあり即座に行動、オリジナリティーを出そうと名前だけ変えて「おやじ倶楽部」とし設立、試行錯誤の連続でしたが12年を経過した今でも後輩のおやじ達はどうにか頑張つて続けて下さっているようです。

さて、「おやじ倶楽部」設立、活動の過程で先生方とお話をする機会も増えるにつれ、本音もちらほら伺う事が出来ました。例えば、問題が起こるたびに提出書類が増えること、そして、その事に忙殺され子供たちと接する時間が少ないこと、それ以上に学校にある種のヒエラルキーが存在し、仕事の一部の先生に偏り書類を家に持ち帰り土日も無い状態の先生もいる事etc、先生方に「しっかり頑張つて下さいよ」との思いが、少しずつ同情に近いもの変わっていった気がします。それを感じたのは私だけではなく、おやじ達も同じように感じていたと思います。だからと言って何かが変わるわけではありませんでした。先生方に少々

の不満と同じくらいの同情を感じつつ、私の子供たちは私立高校に進学することとなりました。なんと3人とも。

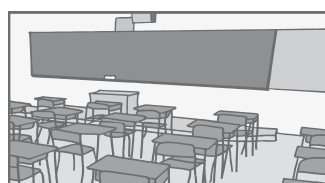
そして、末娘の高校入学とともに私も保護者会の一員となりました。高校の保護者会ですから義務教育のPTAと単純に比べることが出来る訳でないことは承知しています。はじめは当然戸惑いもありましたが、しばらくすると今までと何かが違う、と感じ始めました。それは、何でしょうか？先生方の目です。公立学校の先生に比べて、私学の先生方に余裕があるとは思いません。書類が無い訳でも無いでしょう。それなのに、なぜ目が違うのでしょうか？その答えは簡単に導きだせませんが、私学の先生方は、公立の先生方よりも子供の成長に対する結果が求められていることが一つの答えでは、ないでしょうか。その結果によつては、時には職を追われることも有るでしょう。

先生方の置かれている環境は公立の先生より厳しいはずですが、先生方の目は輝いている。やはり子供の成長に対する結果責任と人を育てる喜びを感じられること、これが目の輝きの理由だと私は思います。

先生方のこの目の輝きを含めた「教える」という姿勢だけではありませんが、今後私学が果たす役割は更に重要

となり、それゆえに、社会からの期待は増して行くこと確信しています。

この様な思いの中、先日オランダの教育を学ぶ機会がありました。先進的な教育の一つであり、異なる年齢の子供によつて学級を編成し自主性を尊重する「イエナプラン」という教育です。その特徴は、日本でいう小学1～3年生の編成、4～6年生の編成でクラスを構成するところにあり、自習を基本としつつ、対話や遊び、催しなどを組み合わせたカリキュラムを編成しています。先生と子供が輪になつて座り、様々な出来事を話し合います。そして、3年間同じ先生のもと、年少、年中、年長とそれぞれの立場を経験すること、人との接し方を身に着けることができるのだそうです。自然とリーダーシップも身に付き、成績も他校と比較してとても良いそうです。既に埼玉県内の私立の小学校で似た教育方法を導入している学校も有ると聞きます。これも私立学校の可能性の一端だと思えます。私学には可能性がまだまだあります。今後益々の私学の発展を期待して歩ませて頂きたいと思えます。



生徒・保護者から信頼される中学校進路指導の在り方

「埼玉県進路指導改善検討委員会報告書」を受けて

埼玉県中学校長会会長 永島 宣幸
(滑川町立滑川中学校校長)

平成二十六年、埼玉県教育委員会は、「生徒・保護者から信頼される進路指導の在り方について」検討し、改善を図るため「埼玉県進路指導改善検討委員会」を設けた。その検討結果は、平成二十七年三月に報告書としてまとめられ、県内全公立中学校に配布された。報告書によれば、「生徒一人一人に寄り添ったきめ細かな進路指導を行うためには、中学校教員が直接高等学校等を訪問するなどして情報収集する中で、中学校と高等学校とが連携を一層強化した指導体制づくりが大切である」と述べられている。

これまで「生徒の能力・適性、興味・関心や進学しようとする高等学校の特色などから、生徒が主体的に選択する、生き方指導としての進路指導」が求められ、県教育委員会や文部省から通知が出され、その結果として現在のような進路相談における中学校での資料不足や中学校と高等学校との連携が

不足し、生徒・保護者から、「中学校は適切な進路指導をしてくれない」という言葉も聞かれる状況となった。

このようになったのは、平成四十年に県教育委員会から発出された「中学校から業者テストの偏差値等を高等学校へ提供しない。中学校が業者テストの実施に関与しない」等の文書であり、平成五年二月に出された文部事務次官通知「業者テストの偏差値を用いない入学者選抜の改善」が求められたことによる。文部事務次官通知には、「業者テストによる偏差値等に依存した進路指導は行わないこと」とあり、県内では平成九年度を最後にすべての「公的テスト」が自粛され、結果として公立中学校から偏差値も消えた。それまでも公立中学校では、偏差値のみに依存した進路指導が行われていたわけではないが、進学先決定における資料としての業者テスト偏差値の占める割合が大きかったことは事実であった。

その後、生徒・保護者による主体的

な進路選択を重視するあまり、教員が高等学校に出向き情報収集することの不足や、中学校と高等学校との情報交換の不足などが指摘される中、平成十八年十一月、県教育委員会教育長通知として「今後の進路指導・キャリア教育の充実について」が発出され、市町村教育委員会や校長会等の公的な実施主体が、高等学校等への進路相談に活用するための学力テストを実施・活用することについては、平成五年文部省通知の内容を踏まえたものであれば、実施できるものとなった。

こういふ状況の中で「埼玉県進路指導改善検討委員会」が設けられた。その報告書の中で注目すべき点は、中学校と高等学校の連携を深めるため中学校の教員が高等学校に足を運び情報の収集に努めること、中学校内において各種テスト(校外において実施された模擬試験等も含む)の結果や偏差値等を有効に活用し、生徒の個性を活かした進路指導の充実を図ることがある。

これまで、どちらかというと中学校内において避けられてきた偏差値等の活用を通して、より客観的・的確な情報に基づく進路指導を進めていくことにより保護者・生徒からの進路指導における信頼を確立していこうとするも

のである。

これを受け、県中学校長会では、平成二十七年七月一日付けで県内全公立中学校長あてに「進路指導Q&A」を送付し、進路指導における改善点の周知を図っている。具体的な項目の中には、「望ましい進路指導が行われるよう高等学校等の開催する説明会等に教員を積極的に派遣し、適切な情報を把握する」「生徒の進路・学校選択について中学校で相談したり、支援したりする際、多くの客観的な資料を用いることが必要であり、生徒が個人的に受けた業者テストや校外での様々な資格試験等の結果を活用することなどがある。

今後、中学校における進路相談を充実させ、生徒・保護者から信頼されるためには、中学校と高等学校の間の情報交換を密に行っていくことが必要であり、これまでも埼玉県私立中学高等学校協会の皆様に実施していただいている「中学校の先生方対象の学校説明会」や「私学フェア」などに積極的に職員を派遣し、高等学校が求める生徒像を知るとともに、校内で使う進路指導資料として偏差値等のデータを蓄積していく必要がある。

人のために学び社会貢献する

中高協会副会長 青木 徹
(開智学園理事長)

今年のノーベル医学・生理学賞を受賞した大村智博士は埼玉県にも深い関係があります。

北本市にある北里大学メディカルセンター病院は、北里研究所75周年記念として、大村博士のノーベル賞受賞の理由となった「エバームメクチン（イベルメクチン）」の特許収入を原資として、当時北里研究所の副所長だった大村博士が先頭に立って創られた病院です。

また、この病院には病人の心を癒す絵画がいたるところに展示されていますが、これも大村博士のアイデアで、病気を治す治癒力を高める効果があるといわれている絵画を病院に飾ることで、若手の芸術家の支援にもなっています。さらに、ここにはインフルエンザのワクチンを創る研究所も併設されています。

さて、ここからは2年前に書いた大村博士の業績と博士から学んだ教育のあり方や考え方を述べた文をそのまま転載します。

大村博士は山梨県で生まれ山梨大学

の学生時代に化学を専攻し、有機、無機、物理化学と幅広く学んだだけでなく、生物学、地学や鉱物学、人体生理学と多くの他の分野の実験や講義も受けました。

その後、東京理科大学大学院理学研究科を出られ、山梨大学の助手を経て、北里研究所に入所し、微生物の研究を始めました。

北里研究所は創設者の北里柴三郎博士の『実学の精神』が根づいており、大村博士は『自分も人の役に立つような薬を作りたい』と考えました。

当時の研究所には十分な研究費がなく、そこでアメリカで研究していた当時の人脈を頼り、世界中から研究費を支援してくれる企業を探しました。

当時の産学協同研究は、企業の片棒を担いでいると批判的な声もありましたが『お金が無いから、よい研究が出来ないというのでは、社会貢献できる研究は出来ない』『企業も社会に貢献できる研究には支援してくれるはずだ』と考え「よい薬を創るには、共同

研究が必要だ」と周囲を説得しました。

それから、年間何千もの微生物を土壌から分離して調べ、微生物が作る化合物を探し、微生物の持っている作用・効果や医薬品としての可能性を追求するために、分子レベルや細胞レベルで解析を進めたそうです。

これらの有機化合物の構造を決定するのに、当時は画期的だったX線結晶構造解析を利用したのは、大学時代の幅広い学びを経験したためと大村博士は語っています。

博士はどこへ行くにもスコップとビニール袋を持ち、役にたちそうな細菌のいそうな土壌をスコップで採集し持ち帰りました。

こうして発見したのが、1979年に伊豆の川奈の土壌の中にいた、抗寄生虫抗生物質エバームメクチンです。エバームメクチンはアメリカの製薬会社メルク社が畜産動物の寄生虫の薬として販売し、世界の動物薬の売り上げナンバーワンを記録し続けていますが、この薬が人間の寄生虫にも効果があることがわかりました。

エバームメクチンは、アフリカの風土病で、感染すると視力障害を起こし、2割の人が失明するオンコセルカ症の特効薬として、北里研究所とメルク社の無償提供で、WHO（世界保健機構）により毎年7000万人以上の人に投与され、この地域の人を失明の危険性

から救っています。

この薬によって、アフリカの人々は、蚊が人の血をすうときに、フェエリア（一種の寄生虫の卵を伝染させられる恐怖から救っただけでなく、この蚊が多くいる河川周辺で農業が安心して出来るようになり、生産性も上がることで、アフリカの人々を貧困から救うことの一助となっています。

さて、大村博士から教育の目指す方向性や学びのあり方『学問や偉大な発明・発見は、日常の小さな疑問や発見から始まる』『何か面白いこと、不思議なことを体験したら、自分なりに考え、調べ、実験し、わからなかったら人に聞いてみる、そして理解する。この過程が学問を形づくっていく』など、ご指導をいただいています。

博士は昨年文化功労受賞しただけでなくノーベル賞を除く、世界中の著名な賞を受賞し、この業績はノーベル医学・生理学賞にも、平和賞にも値すると多くの方から賞賛されています。

さて、生徒諸君も大村博士のように、自分の得意分野で活躍できるように、ものごとを本質的に捉え、原理・原則から学び、疑問を解明し、社会に貢献できる人になれるよう勉学に励みましょう。



求められる私立学校像

中高協会理事 渡辺 達治

(正智深谷高等学校校長)

私は正智深谷高校で校長になって5年目になります。それまでの35年間余りは、民間企業でサラリーマンをしていました。いわゆる民間人校長です。

勤めていた会社は航空会社でした。

事務系社員として入社し、最初の数年間は予約や発券の仕事に就きました。

札幌支店やサンパウロ支店に転勤もしました。入社してから7年ほど経った時に、客室乗務員の社内募集がありました。机に向かって仕事をするよりも、身体を動かす方が性に合っていたし、接客の仕事がしたかったので、手を挙げて客室乗務員になりました。以来退社するまでの28年間は客室部門で仕事をしました。

自ら希望して乗務員になりましたが、実際に乗務したのは10年間足らずでした。訓練部で3年間インストラクターを務めたのを皮切りに、機内サービスの企画業務など、結局大半は地上で仕事をすることになりました。中でも教育、訓練には直接あるいは間接的に、長らく携わりました。

若い人たちの教育、指導や採用試験に関わった経験から、とても気になっていたことがあります。それは若者に覇気がなくなり、内向きになっていくのを肌で感じたことです。それが会社を退職した後、教育の仕事について理由でもあります。

当時客室乗務員は人気のある職業で、競争率が数十倍という状況でした。小さい頃からの夢だったという受験生も多く、皆必死で合格を目指していました。ところがいつの頃からか、訓練がきついという理由で、ドロップアウトしてしまう訓練生が目立つようになりました。私の目からみれば素質はあるのに、我慢ができない人が増えたのです。

乗務員になってからも、仕事がつきついという理由で辞めてしまう人が多数いました。他の企業でも同じ傾向のようです。一部上場の大企業でも、少しトラブルがあると辞めてしまう若者が多くて、困ったものだという話が、仲間内でも時々話題になります。

内向きになったという話も良く話題にでます。海外勤務は嫌だ、という若者が増えています。また、出世競争は嫌だ、自分のペースで生活できればそれで良い、という覇気に欠ける人も増えていくように感じます。私の周りにいる高校生たちも、良い子たちばかりです。梓からはみ出す子も少ないし、物に対する欲や執着もあまり感じません。高校としてはありがたい生徒たちなのですが、ギラギラした目で夢を語る生徒たちで溢れていた、自分の高校時代を思うと、少し物足りなさを感じます。

なぜこのようになってしまったのでしょうか。最大の原因は、日本があまりに豊かになり、ハングリー精神が失われてしまったためではないでしょうか。労働の流動化や非正規雇用の増加が問題になっていますが、その原因の一端もここにあると思います。

日本は少子高齢化が加速度的に進み、巨額の財政赤字を抱えています。一方アジア諸国の発展には、目を見張るものがあります。タイやベトナム、インドネシアといった国々を訪れると、街に若い人が溢れていて、その熱気に圧倒されます。私が学生だった頃の、高度成長期の日本の姿と重なります。日本が、国力を維持してゆくには、これらの国々と伍してゆかねばなりません。

日本が第2次大戦後の壊滅的な状況から素早く立ち直り、今日の繁栄を築くことができたのは、人の力です。そしてその人を育てたのは教育の力です。その日本人の潜在力は今でも健在です。東日本大震災で甚大な被害を受けた被災者の方々が、乏しい物資を分け合う姿は、世界中から称賛を浴びました。

またノーベル賞を受賞した日本人は、今年で24人になりました。この方々の発明、発見は人類を救い、豊かにしています。高い技術力とグローバル化こそが、豊かで居心地の良い日本を維持してゆく条件だと思います。

わたしたち私学は、それぞれの学校が建学の精神を持っています。建学の精神に則って高い人間性を備えた人材を輩出することを目的に、学校が作られています。これからの日本を背負うには、勉強ができるだけでは不十分です。人の役に立ちたいという高邁な意思と、それを実現するための社会性が不可欠です。それらをバランス良く伸ばすことこそ私学の使命です。私たちが社会から求められているのは、覇気に溢れ、明日の日本を安心して任せられる人材を育てることです。その使命を果たすべく、精一杯邁進したいと思っています。